北羽新報

2024年（令和6年）3月17日（日曜日）　（8）

# 遺跡や出土品理解

## 専門家が解説、100人聴講

柏子所貝塚・麻生遺跡の特徴を解説した講演会

16日の「柏子所貝塚・麻生遺跡の遺物展と関連講演～能代縄文を見て・聞いて楽しもう!!」では、県立博物館副主幹の加藤竜さんの講演もあり、市民らが柏子所貝塚、麻生遺跡それぞれの概要や出土品の特徴などに理解を深めた。

縄文時代晩期の遺跡である柏子所貝塚では、七つの土壙墓から計8体の屈葬人骨を確認。加藤さんは「8体のうち7体は頭が西向き。墓を作る段階で方角を意識していたと考えられる。向きをそろえることは同じ家族、同じ集落といった、その人たちの何らかの出自を表しているのではないか」と述べた。

麻生遺跡の重要な出土品である土面については、目や口に穴が開いていないことや長さ約14チセンという大きさ、東北の他の縄文遺跡から出土した土面の特徴などから「顔面に取り着けたものではなく、何かにくくり付けて使われていたのでは」と推測。また土偶が全国で何万点と見つかっているの対し土面は約100点しかないことや、土面の文化は九州など西から東、北へと伝播（でんぱ）したものだとも紹介、「秋田の土面は、土面の最後の姿」と解説した。

講演は約100人が聴講した。きょう17日は、県埋蔵文化財センター前所長の谷地薫さんが「能代地区の縄文時代後期」をテーマに講演する。午前10時30分から市中央公民館第5研修室で。無料。